

道徳的情動は何ゆえに道徳的なのか

信原幸弘（東京大学）

情動のなかには、道徳にとって重要な役割を果たすものがある。怒り、嫌悪感、罪悪感、恥、憐れみ、感謝、などである。たとえば、怒りは道徳的不正を情動的に認識し、非難行動を動機づける。この種の情動を道徳的情動とよぶことにしよう。

道徳的情動は何ゆえに道徳的な情動なのであろうか。プリンツ(Prinz 2010)が指摘するように、どの道徳的情動も道徳に固有なわけではない。たとえば、私たちは非常に困難な仕事に怒りを覚えて、せっかく途中までやったことをぶちこわしたくなることがある。このような怒りは道徳とは無関係であらう。罪悪感や怒りよりは道徳に固有のようにみえるが、それでも戦争や災害で生き残った人たちが亡くなった人たちに対して感じるサバイバーズ・ギルトは道徳とは無関係であらう。

道徳的情動が道徳に固有でないとすると、道徳的情動は道徳を構成するがゆえに道徳的なのではなく、道徳的判断の結果として生じるがゆえに道徳的だという考えが出てくる。たとえば、その行為は不正だという道徳的判断がまずなされ、それによって怒りが生じるがゆえに、怒りは道徳的だとされるというわけである。しかし、プリンツはこのような考えに反対し、むしろ道徳的情動によって道徳が構成されると主張する。

では、どのように構成されるのだろうか。この点については、プリンツよりもヘルム(Helm 2014)のほうが参考になる。ヘルムは道徳的情動が合理的なパターンを形成すると主張する。不正をした者に怒るなら、自分が不正をしたときには罪悪や恥を感じるべきだし、不正をした者が十分に謝罪したときには赦しの情動を抱くべきである。個々の道徳的情動が道徳に固有でなくても、道徳的情動が形成する合理的パターンは道徳に固有ではないだろうか。もしそうだとすれば、道徳的情動とは道徳に固有の情動の合理的パターンを構成するような情動だと言えよう。

しかし、ここにはひとつ重大な問題がある。道徳的情動が合理的パターンを示すのは、一言で言えば、人間に尊厳があるからであらう。尊厳のある人間が不正を犯すからこそ、怒りが生じるのであり、尊厳のある人間が謝罪するからこそ、赦しの情動が湧くのである。そうだとすれば、道徳は道徳的情動に先立って人間の尊厳という価値によって構成され、道徳的情動はそのような道徳に関連して生じるがゆえに道徳的であるにすぎないのではないだろうか。

ヘルムは人間の尊厳が道徳的情動に存在論的に先立つという見方を否定し、尊厳と道徳的情動は存在論的に対等であると主張する。しかし、存在論的に対等であるというのはどのようなことであらうか。それは結局、道徳的情動が尊厳に依存し、尊厳が道徳的情動に依存するという悪しき循環になってしまわないであらうか。この問題を解くには、道徳実践がいかにして成立しうるかを考察することが重要だと思われる。道徳実践は道徳的情動ぬきには成立しえないが、道徳的情動は私たちが恣意的に抱けるものではなく、尊厳ある

者に対してのみ抱ける。この意味で、道徳的情動と尊厳は対等である。そして道徳的情動は尊厳という道徳的価値と対等に道徳実践を成立させるがゆえに道徳的なのである。